

1. 積丹半島の経時的和名調査の概要

1979年から2022年まで北海道積丹半島の漁師を対象に、次のように星の和名調査を実施した。

(1) 1979年4月

① 北海道積丹郡積丹町美国

和名 アカボシ(アルデバラン)、サンコウ(オリオン座三つ星)、アオボシ(シリウス)

「何でもかんでも、わしゃたいてい試してみた。アカボシちゅうアカメシタ星があがるの。それからサンコウだな。アカボシからサンコウだな。サンコウと言って、同じ間隔の星が三つあがるの。それからやっぱり二時間か二時間ちょっとあまりあとに、アオボシという星があがるの。数ある星のなかでアオメシテひかるの。その星がいちばんつく。その星とアカボシがつくの。どっちの星もつくけど、アオボシちゅうのがいちばんつく。完全につくだ。そのかわりずっと時間がおそいのよ」(話者生年、明治41年)

星の出をイカ釣りの目標にしていたが、そのなかでも最後にのぼるアオボシ(シリウス)の出が最も釣れるときと伝承していた。

② 北海道積丹郡積丹町泊村

和名 トボシ(能登星)(カペラ)(話者生年、明治45年)

③ 北海道磯谷郡蘭越町港町

和名 サンコウ(オリオン座三つ星)、トボシ(能登星)(カペラ)

蘭越町において、積丹半島からのぼるカペラの和名をトボシと記録した。

また、星だけでなく、潮の変化を合わせて観察しなければならないと伝えていた。

「どの星のときにでも、イカがつくとは限らない。潮と星の出が合致するとつく、と、わしらは、丹念している。サンコウの出に昨日ついたからといって、今日つくとは限らねえ。潮と合わなければだめだ」

(話者生年、明治40年)

(2) 2014年10月

・北海道積丹郡積丹町幌武意町(ほろむいちょう)

和名 ウヅラボシ(プレアデス星団)、ミツボシ(オリオン座三つ星)

「学校終わるとすぐ漁師やってね、おやじと2人でね、小さい磯船で、イカつけに2人のってね」

「東の空にね。午後11時頃出てくるのですよね。10月のね20日頃からね、12月の10日頃までさっき言った磯船でね。イカ釣りするのです。日暮れにイカつけに出てね。6時頃出てね。一晚イカつけして。その星がウヅラボシって、11時頃、東の空からあがってくる。かたまって、3つか、4つ、かたまってあがってくるの。海から。その星があがってくる所に、イカがつきだしてくる。漁師の人がイカがつかない

いし、その星があがってくるまで起きてるの。豊漁のときはすぐつく、漁のない日もあるから。その星のあがるまで待つて」

「星はさまざまにあがってくるけど、その人によって、丹念してるから。漁師のことばでは丹念してるって。ほかの星にあったけどわすれてしまって、思い出せないの」

「ミツボシも言った。おれは、うづらぼしとか言って、おやじから話をきいて。ミツボシ丹念してない」

「あの星ウヅラボシというの。かたまって。明るくない。ミツボシのほう、こう3つならんでね。縦にね。縦に。ミツボシね。ミツボシは明るい」

(話者生年、昭和9年)

(3) 2022年4月

①北海道積丹郡積丹町入舸(写真右)

和名 ナナツボシ アケノミョージョー

「この星出ていたら潮目が変わる。潮目が変わるとイカがつくぞ。アケノミョージョー(明けの明星)がひかっている。明るい星があがると、イカがつく」



「北斗七星の傾きでいま何時。真ん中の大きい星。動かない」

「北斗七星、ナナツボシと言っていた。トンネルをぬけると番屋があった。そのあとが残っている」

(話者生年、昭和27年)

②北海道岩内郡岩内町島野

和名 ミツボシ(オリオン座三つ星)、ナナツボシ(不明)

「ミツボシ、ナナツボシ、じいさまが言っていた」

「岩内山の上に雲がかかるとヤマセ。しける」(ここではヤマセ、南の風)

(話者生年、昭和26年)

(4) 2022年6月

前項2014年10月の調査と同じ話者に会うことができたのみであった。美国においても、イカ釣り漁師はいなくなり、目標とされた星の和名を記録することができなくなった。

2. 積丹半島の経時的和名調査の整理

1979年においては、次のような星の色の認知にもとづく星名形成がなされ、のぼる星の順を生業に役立てていた。

アカボシ…アルデバラン

アオボシ…シリウス

星を目標にするイカ釣り漁を生業としなくなった 2022 年においても、和名の記録は可能であった。しかし、生業との関連は小さくなってしまい、2022 年に記録した北海道積丹郡積丹町幌武意町の事例では具体的なイカ釣りの目標としていたのはプレアデス星団のみとなっていた。

3. 積丹半島の経時的和名調査の分析

1979 年 4 月、北海道磯谷郡蘭越町で出会った明治 40 年生まれのイカ釣り漁師からカペラの和名「能登星」を聞いた。積丹半島からのぼる「ぎょしゃ座カペラ」を積丹星と言わずに先祖の故郷の地から見た能登半島からのぼる光景をもとに形成された星名「能登星」と呼んだのである。

能登半島から遠く離れた北海道で、積丹星ではなく「能登星」が時間軸と空間軸を超えて共有された。経時的和名調査を実施していると同時に空間軸の移動を伴う分析へと展開していった。七夕のローソクもらいと同様に本来の伝承が形成された地域ではない北海道で伝承された事例である。能登星の場合は、明らかに積丹半島を認知しながら積丹星ではなく認知と異なる星名「能登星」が伝承されたことが認知天文学の視点から特記すべき点である。



図1 故郷から能登半島にのぼるカペラ



図2 故郷離れて積丹半島にのぼるカペラ

積丹半島に移住した人の故郷、福井県三国町でイカ釣り漁師に能登半島にのぼる能登星について聞く。

「能登半島の先よりちょっと、内側からひとつぼしであがる」

能登星と暮らしていた頃、星ぼしの創る時間で釣れるタイミングを判断していた。日が暮れて最初に関係するのは、宵の明星であった。

「宵の明星というのは、晩方、この島に上がってるのじゃ。船で行く時分に、六時、七時に。それで、八時頃になれば、宵の明星のはいるときに魚が釣れるんだ。スズキでもタイでも何でも。その星のはいるときにばたばたと」

目標にしていたのは、イカでなく、主にスズキやタイであった。

宵の明星のはいった後、しばらく釣れなくなるが、再び、ホーキボシ(プレアデス星団)やサカヤノマス(オリオン座三つ星と小三つ星と η 星でつくる星の形)がのぼるときに釣れるようになることについて、次のように語った。

「ホーキボシいうのがあがってくるのじゃ。そのときもよう釣れるのじゃ」

ホーキボシ(プレアデス星団)とほぼ同時にカペラがのぼる。しかし、プレアデス星団は低い高度では気づくのが困難であり、カペラを補助的に目標にしたのである。

「夜明けになってくると、サカヤノマスって、こういう格好したのが三つ、柄も三つついて。この星があがるときも、魚よう釣れるんじゃ」

「この星の出る間は釣れても、30分ほどしたらびたって止まってしまう。釣れても止まるわけ。たまには来ても道具にさわって行くだけで…。星のあがるちょっと前から、さわぎだすんだ。あがってしまえば、知らん顔する。あがるちょっと前からさわぎだす。魚が…」

ここで、サカヤノマス(オリオン座三つ星と小三つ星と η 星でつくる星の形を認知)と呼ばれていた星名が蘭越町であった三つ星のみを認知したサンコウであった点が新たな課題としてあがってくる。能登半島から遠く離れた北海道で、時間軸と空間軸を超えて共有された「能登星」と変化したサカヤノマス…サンコウがあったのである。認知に従わない星名の伝承と認知の変化については、認知天文学の今後の課題としたい。